

農村地理学の誕生・発展と UCL 地理学教室－Coppock・Clout・Munton

梶田 真

(東京大学大学院 総合文化研究科)

- I はじめに
- II UCL 地理学教室－Darby の教室運営とその影響
- III 農村地理学の誕生－Coppock と Clout
- IV 学際的農村研究の成立への貢献－Munton 達と農村社会学者達との共同研究
- V おわりに

キーワード：農村地理学，UCL 地理学教室，Terry Coppock, Hugh Clout, Richard Munton

I はじめに

1960 年代初頭，私が学部学生だった頃，ロンドン大学¹⁾のシラバスには“農業地理学”も“農村地理学”も存在しなかった．その一方で，“農村集落”の研究は全体的に形態学 (morphology) に関わるものであり，歴史的な志向性を持っていた… (Clout 2005: 375)．

上記の一節は 1972 年に『農村地理学 (Rural geography)』と題されたテキストを公刊した Hugh Clout が，約 30 年後に同名テキストを公刊した Woods (2005) に寄せた書評の冒頭の 1 節である．農村地理学という分野が成立した，あるいは，農村地理学という名称がアカデミックな地理学の中で浸透するようになったのは，1970 年代初頭であると考えられており，その転機となったのが前記した Clout の『農村地理学』の公刊とイギリス地理学者協会 (Institute of British Geographers / IBG)

における農業地理学研究グループ (Agricultural Geography Study Group) の農村地理学研究グループへの改称 (1973 年にグループ内で決定) である．

その後，約 30 年あまりの時間を経て，この研究分野はある種の学問的成熟に達したように思われる²⁾．Woods の『農村地理学』や筆頭編者の Cloke をはじめ，多くの農村地理学者が執筆を行っている『農村研究ハンドブック (Handbook of rural studies)』 (Cloke et al. 2006) などの包括的なテキストの公刊や研究の総括が行われ，これらの著作や Lowe and Ward (2007) による研究史の整理，さらには，Miller (1996) に端を発したその評価をめぐる論争などが相次いで示されているが，こうした著作や議論が出現したことは，このサブディシプリンが地理学内においてしかるべき地位を確立したことのあらわれであるといえよう．筆者は，近い将来にイギリスにおける農村地理学，あるいは，農村社会学をはじめ周辺領域と融合した学際的な農村研究 (rural studies) の展開を整理したいと考えており，本稿

はそのための1作業ノートである。

本稿では、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ（以下、UCLと記す）地理学教室という、1つの地理学教室の3人の農村地理学者 Terry Coppock, Hugh Clout, Richard Munton に焦点を当てて、農村地理学の誕生とその発展の背景について跡付けていく。本稿は、本章以下、5章で構成される。IIでは、UCL 地理学教室の特徴について、1950年代から1960年代にかけてUCL 地理学教室の主任教授として、この教室を大きく発展させ、その特徴を形作るようになった歴史地理学者 Darby の影響を中心に整理する。IIIでは、Clout と、IBG の農業地理学研究グループを創設し、その委員長であった Coppock を軸に農村地理学の誕生の背景を整理する。IVでは、Clout と共に、UCL でこの分野の指導にあたった Munton とその弟子たちを取り上げる。Munton らは、イギリスの有力な農村社会学者との間で共同研究を進め、顕著な成果を上げた。Munton らの業績は、農村地理学と農村社会学、そして農村に関わる様々な分野の間で学際的な農村研究を確立していく上で大きな役割を果たすことになった。Vでは、UCL 地理学教室という場が農村地理学の誕生とその発展を主導した研究者を生み出した要因について簡単に考察し、まとめとする。なお、本稿は、彼等の研究史を網羅的に跡づけるものではなく、重要なトピックに焦点を絞って検討作業を行う。

II UCL 地理学教室—Darby の教室運営とその影響

UCL 地理学教室の教室ホームページには「非常に簡潔な教室史 (A very brief history of department)」と題された教室史の記載がある (UCL Dept. of Geography, 2010)。その記述をみるとこの教室の発展に対する Darby の寄与と影響がいかに大きなものであったかを伺い知ることができる。

歴史地理学の大家であり、若くして学界内で確

固たる地位を確立していた Clifford Darby (1909～1992)³⁾ は、まだ40歳にも達しない1949年にUCL 地理学教室の主任教授として迎えられ、母校のケンブリッジ大学地理学教室に戻るまでの17年間の在職期間中、卓越した教室運営および学内政治能力を発揮した。Darby はUCL 地理学教室着任後、「学問・学部・大学院について、自らの教室を拡大し、その質を高めるプログラムに着手した。在職した17年間で、Darby は全く新しいスタッフを採用し、UCL における同起源のディシプリンとの戦略的な連携をあらゆる形で利用」(UCL Dept. of Geography, 2010) し、スタッフを大きく拡充した⁴⁾。Darby の個性は教室運営に色濃く反映され、例えば、地誌の考え方を強く支持していた Darby は、若い同僚たちに特定の場所・国あるいは大陸に深く関わる (immerse) よう促し、Darby が任命した若いスタッフの多くには、世界の特定の地域が割り当てられた⁵⁾ (Baker 1992: 496-497)。

Darby がUCL 地理学教室を牽引した17年間の後に、この教室は2つの特徴を持つことになった。

第1に、スタッフの年齢層・ポストの偏りである。Darby はスタッフの拡充にあたって次々と若い有能な研究者を採用した。その結果、20名を超えるスタッフへと拡充されていき、イギリスの中でもっとも大きく、幅の広い教室となった (Clout 2007: 192)。その一方で、UCL 地理学教室のスタッフの年齢構成やポスト構成は著しい偏りを見せるようになる。UCL Dept. of Geography (2010) によれば、1964年にロンドンで国際地理学会議 (International Geographical Congress) が開催された際に、UCL 地理学教室のスタッフは20人以上の講師を抱える一方で教授は Darby 一人という状況であった。

第2に、UCL 地理学教室が、Darby 自身の専門分野である歴史地理学の研究拠点となっていたことである。Baker (1992) の言葉を借りれば、「スタッフのすべてがある程度は、歴史地理学者であっ

た (all of the staff were, to some degree, historical geographers)」(Baker 1992: 496)⁶⁾。

これらの2つの特徴は、UCL 地理学教室における教育や研究に大きな影響を及ぼすことになる。Darby が母校ケンブリッジ大に去ったのちに、その後を継いで1966年にUCL 地理学教室の主任教授(在任期間1966～1981)となったMeadは、Darby がUCL 在職初期に採用したスタッフの一人であるが、Darby が採用した若いスタッフの加齢・学問的成果の蓄積によってUCL 地理学教室のスタッフ構成は過密状態となり、また、歴史地理学者であふれかえるようになっていた(Clout 2003)。既存のスタッフの一部は、より上級のポストを求めて他大学へと去り、新たに主任教授となったMeadもこの構成の偏りを是正するために多くの教授を採用すると共に、1960年代後半に相次いで若いスタッフの採用を行っている。この時期をClout (2007: 192)はさらなる拡張と活性化の時期であったと振り返っているが、このようなUCL 地理学教室の雰囲気の中で農村地理学は誕生し、発展していったのである。

Ⅲ 農村地理学の誕生—Coppock と Clout

農村地理学という分野の確立とこの名称の浸透において重要な役割を果たしたのがCoppock (1921～2000)とClout (1944～)である。

Coppock は、UCL 地理学教室で長年に渡って農業地理学を担当していたが、1965年にUCLを離れ、Ogilvie教授(Ogilvie chair)としてエジンバラ大学に移っている。Coppock もまた、1949年にDarby がUCLのスタッフとして迎えた1人であり、15年あまりにわたって、UCL 地理学教室の教育・研究活動に従事した。また、UCL時代には、大学院の環境保全コース(Conservation course)の運営にも強く関わっていた(Clout 2007: 192)。このことは、後述するように、Coppock が同じ分野を

研究する、ディシプリンを越えた研究者間の協力を志向していたことを反映している。

Coppock は、農村地理学の研究者としてよりもむしろ、GIS研究の創始者の一人として知られており、エジンバラ大学地理学教室では、世界で最初のGISの修士コースの発展に貢献している。Coppock は『International Journal of GIS』誌の最初の編者(1986～1993)も務めている(Collins 2001)。

彼の主たる関心は、イギリスにおける農村の土地利用にあり、その延長上において、農地のありようを規定する農業の研究にも携わっていた、というべきであろう。Coppock が亡くなった際に『Transactions of the Institute of British Geographers』誌に追悼記事を記したCollinsによれば、Coppock の活動領域は、(1)農村地理学に関する研究、(2)コンピューター技術に関する研究、(3)ツーリズムとレクリエーションに関する研究、の3つに分類されるという(Collins 2001)。第3の研究領域に関して、1960年代の段階でCoppock は、活力ある農業経済を維持することとレクリエーション空間を供給することの対立関係を認識していた。このような認識は、後に彼を公共政策およびプランニングに関する研究へと向かわせることになり、Coppock は、関係した多数の学問的な、そして政府関連の委員会や審議会の要職を歴任することになった(Collins 2001)。

Coppock の志向性を端的に示しているのが、東アングリア大学で開かれた1974年のIBG年次大会における「公共政策と地理学(Public policy and geography)」と題された彼の会長講演である(Coppock 1974)。

Coppock は、この会長講演において、地理学が公共政策に参画することの挑戦・機会・意義を論じ、当時の学生たちもこのような参画を歓迎していると考えていた(ジョンストン 1999: 217)。Coppock の主張に対し、Harvey (1974)の「どのような種類

の公共政策のためのどのような地理学か？」論文をはじめとして、この大会に提出された論文の多くは彼の主張に異を唱え、反論するものであったことは広く知られている。

本稿の内容との関係において注目すべき点は、この会長講演において Coppock が、政策志向的な応用研究を発展させていくためには、研究志向的な大学と教育志向的な大学を明確に区別し、研究分野による専門化が必要である、と主張していることにある。特に後者について、多くの地理学教室では、間口の広さという長所の反面、それぞれの専門分野について1人のスタッフしか抱えておらず、同じ分野の他の研究者と議論を行うための刺激を欠いている、と指摘する (Coppock 1974: 3)。そして、環境・資源分野における東アングリア大学の環境科学部、エジンバラ大学の森林・天然資源学教室、そして、ロンドン大学ワイ・カレッジにおける農村計画ユニットを引き合いに出しながら、研究・教育面における地理学教室内・地理学教室間、さらには地理学と他ディシプリンとの間の学際的な協力を促進していくことの必要性を訴えている (Coppock 1974: 12-14)。

1960年代から1970年代、すなわち、UCL時代とエジンバラ大学の在職初期において、農業地理学は、Coppockの研究活動の中で大きな位置を占めていたものと思われる。当時、Coppockは、IBGにおいて農業地理学研究グループを設立し、その委員長を務めていた。そして、Coppockの委員長在任中に、農業地理学研究グループではその改称が議論される。1972年に同グループの委員長に再選されたCoppockの下で、同グループは研究の射程を拡大するために、1973年のIBG年次大会の際のビジネスミーティングにおいてグループの名称の変更を議論することになった。この議論に先だって、委員長であるCoppockは『Area』誌において以下のような告知を行っている。

本グループでは、農村資源の利用に関わる全ての面を含むよう、その関心を拡大させるべきである、という主張がなされてきた。農業地理学に関心を持っている数多くのメンバーがいる一方で、充実したプログラムの会合を維持するためには、農業地理学分野の研究に活発に取り組むだけでは不十分であることは、この委員会にとって明らかである。さらに、農業の性格は変化しており、それはとりわけ先進国において顕著である。都市化の幅広い影響、特に、アウトドア・レクリエーションの増大、農業の技術的発展が田園地域に課した諸問題、そして、問題を抱えた農業地域における農地の用途転換は、その最たる例である (Coppock 1972: 236)。

この会合の場において、このような提案の方向性が望ましいことについては、幅広い合意が得られる (Coppock 1973)。そして、新しい研究グループの名称については、「農村資源」や「農村資源管理」への支持もみられたものの、最終的に農村地理学研究グループという名称で合意することになった (Coppock 1973)。そして翌1974年より新たに農村地理学研究グループが発足することになる。

一方、冒頭で引用したCloutは、UCLで学生生活を送り、そのままUCLのスタッフとなった研究者であり、前記したDarby、Coppockは、彼の学生時代の先生であった (クラウト 1983)。Cloutの第1の研究関心は、フランス農村の歴史地理学的研究であり、その意味ではDarbyが築き上げたUCL地理学教室の本流に位置する研究者であった。Cloutは、1972年に学部学生向けのテキストとして、現代農村の諸問題を取り上げた『農村地理学』を執筆する。同書において、Cloutは自らの「農村地理学」の対象を、農村を扱った従来のイギリスの地理学研究において支配的であった農業生産の経済地理学 (農業地理学) や集落の形態・起源・機能の探究

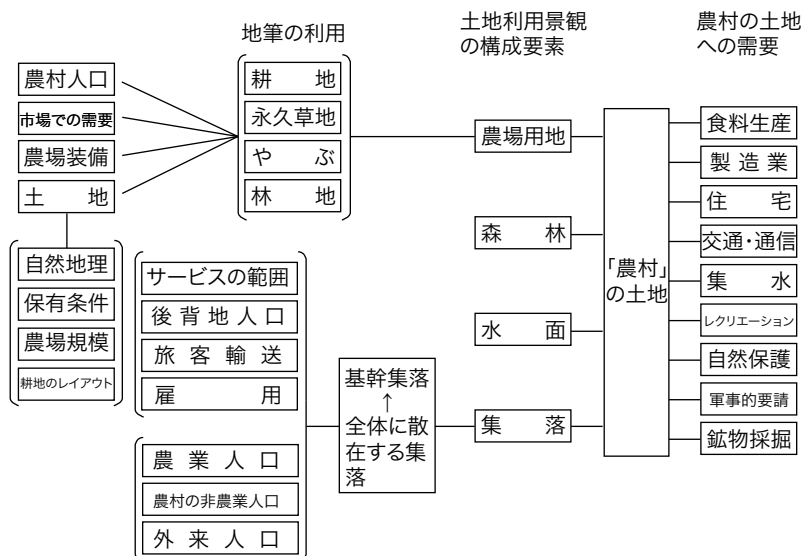


図1 Clout (1972) が示した農村地理学の構成要素
訳語は邦訳書 (クラウト 1983) に従っている。
(クラウト 1983: 2 (原著では Clout 1972: 3) による)

Fig. 1 Components of rural geography by Clout (1972)

を意図した農村集落研究 (集落地理学) とは異なるものである, として以下のように述べている⁷⁾.

農村地理学は, 可視的諸要素により「農村地域」として共通に認識される低人口密度地域において, 近年生じてきたところの社会的, 経済的, 土地利用上および空間上の諸変化に関する研究, として定義されよう (クラウト 1983: 1).

そして農村地理学の構成要素を図1のように整理する.

また, Clout の『農村地理学』は, 以下の13章によって構成される (章タイトルは邦訳書に基づく).

第1章 農村地理学: 展望 (Rural geography: An overview)

第2章 農村の人口減少 (Rural depopulation)

第3章 農村地域の人びと (People in the countryside)

第4章 農村地域の都市化Ⅰ (Urbanization of the countryside I)

第5章 農村地域の都市化Ⅱ (Urbanization of the countryside II)

第6章 土地利用計画 (Land-use planning)

第7章 農業の構造的変化 (Structural changes in agriculture)

第8章 農村の土地の一利用者としての林業 (Forestry as a user of rural land)

第9章 景観の評価 (Landscape evaluation)

第10章 農村地域における集落の合理化 (Settlement rationalization in rural areas)

第11章 農村地域の製造業 (Manufacturing in the

countryside)

第12章 イギリス農村部における旅客輸送
(Passenger transportation in rural Britain)

第13章 農村地域の総合的管理 (Integrated
management of the countryside)

この章立てから明らかなように、『農村地理学』では、農業生産の経済地理や集落の形態・起源・機能には多くの分量を割いていない。それは、Cloutのいう「近年、重要な社会的、経済的、ならびに土地利用上の諸変化が、先進世界の農村地域において生じてきた。しかしこれらは、人文地理学の教科書の著者達によって記録されずに見すごされることが多かった」(クラウト 1983: 2) という認識に基づいて、意図的に従来のテキストで焦点が当てられてこなかった面に光をあてようとしたことによるものである。

Clout は自身の『農村地理学』について「当時のテキストの内容におけるギャップを埋めることを目的として無学を顧みず執筆した」(Clout 2005: 376) と述べている。そして、この本では、それまでClout自身がUCLで農村地理学の名の下で(Clout 2005: 376) 教えていた歴史的な研究に関する文献を全て排し(Clout 2005: 376)、「幅広い読書、そして、イギリス・フランス・アメリカにおける個人的な研究経験の中から素材を蒸留したもの」(Clout 2005: 376) であったという。上掲の図および『農村地理学』の各章の内容は、農村地理学の全体像を示したものであると同時に、現代農村問題として今後なされるべき研究の方向性を示したものである。それは『農村地理学』の各章に「良い蔵書を持つ図書館を利用しうる学生にとってより詳細な研究の出発点として」(クラウト 1983: i) 広範な文献リストを設けていることに垣間見ることができる。

当時、このような試みを行ったことについて、Clout は以下のように振り返っている。

UCLにおける私の“農村地理学”の涵養(cultivation)は、個人的な生き残り戦略の一部であった。率直に言って、私は、自分の歴史地理学とフランスに対する関心を補完するための体系的な支え(systematic support)が必要である、と感じていた(Clout 2005: 376)。

この生き残り戦略は、教育上のものであると共に研究上のものでもあった。当時、Cloutは、自らの博士論文の研究がなかなか進まず、研究上の行き詰まりを感じていた、という(Clout 2005: 376)。また、LoweとWardは、当時のイギリス地理学全体として、研究者の関心が都市や地域変化の定量的な分析へと向かっていくようになる中で、農村の研究はその中核から周縁へと追いやられていくようになり、空間科学の流行によって歴史地理学はある種のアイデンティティ・クライシスに陥った、と指摘する(Lowe and Ward 2007: 4)。さらに、前述したようにUCL地理学教室では、Darbyによる歴史地理学の拠点化によって、スタッフに多くの歴史地理学者が名前を連ねていた一方、Darby転出後はスタッフの入れ替わりが活発に行われていた。このような状況の中で研究・教育における生き残りを図るために、Cloutは現代農村問題という新たな領域に踏み出していくことになったのである。

『農村地理学』は、邦訳書の監訳者である石原が「本書は『農村地理学』の体系的な概説書とはなっていない。・・・本書の章節の構成の仕方にはもっと工夫されるべき点があり、叙述の精粗のバランスにも一考すべき箇所が散見される」(石原 1992: 246)と記しているように、完成度にも少なからざる問題を抱えているが、前述したように、このテキストの公刊は、農村地理学という新しい分野の存在とその射程を明示的に示し、この分野の確立とこの領域に関心を持つ研究者の掘り起こしに大きな役割を果たす

ことになった。特に、上掲の図1は、農村地理学という新しい領域の全体像となるべき研究の方向性を示した先駆的な整理としてしばしば引用され、このサブディシプリンの浸透において大きな役割を果たすことになった (Cloke 1980; 石原 1992)。また、Clout 自身も、当初の計画を変更し、農村地理学をバックグラウンドに位置づけた、フランス近世の歴史地理に関する博士論文を提出し (Lowe and Ward 2007: 17)⁸⁾、歴史地理学と共に現代的な農村問題の研究も射程に収めるようになっていった。

では、Coppock 率いる農業地理学研究グループが農村地理学研究グループへの改称を議論し、Clout が『農村地理学』の公刊を思い立ったのは、学問的関心や研究者としてのキャリア戦略という個人的な要因のみに還元しうるのだろうか。恐らく、それでは不十分であろう。Lowe and Ward (2007: 45) が指摘しているように、これらの動きの背後には、地理学研究における農村研究の地位の低下への懸念と1963年のいわゆるRobbins報告書 (Robbins 1963) 公刊以後のイギリスの大学をとりまく政策的・社会的状況があったと考えるべきである。

経済を発展させ、政治的影響力を増大させていくことにおける科学技術の重要性が認識されていく中で、イギリス政府は1961年に高等教育の全面的見直しと改善策の策定のための首相任命の委員会を発足させた。この委員会の報告書は、委員長であったロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE) 教授のLionel Robbinsの名前をとってRobbins報告書と呼ばれている。この報告書では「高等教育課程は、これに取り組み続ける能力や資格があり、その取得を望む全ての人々が利用できるものとなるべきである」という提言を行い、その後のイギリスにおける高等教育拡大の転機となった。また、この報告書は、イギリスの大学の弱点が学部教育の過度な専門化にあり、学部におけるコースの大幅な増加と大学院の充実が必要であることも指摘している (大

崎 1990; 呑海 2007)。

Lowe と Ward は、農村地理学の出現は、Robbins 報告書公刊後の大学の拡張によって学部レベルの地理学徒がますます増加していく中で、地理学により現代的な訴求力を持った教育を導入する必要性があったことが背景にある、と指摘する (Lowe and Ward 2007: 4)。とりわけ、Coppock は、1974年のIBG大会における会長講演において以下のように述べており、このような認識を強く持っていたことが伺える。

恐らく、教育は我々の最も重要な役割である。特に重要なのは学校教育であり、地理学はローカルな環境、そして世界の環境に関する意識を形作る上で中心的な役割を担っている。総合大学や単科大学においても、教育上の焦点が変化していることを示す証拠が増えてきており、環境問題や資源利用における公共政策の貢献により大きな関心を向けるようになっていく (Coppock 1974: 2)。

このような主張の背景には、地理学コースの卒業生の多くがプランナーをはじめ、空間的な問題に関係した公共政策の現場で働き、貢献している、という事実がある (Coppock 1974: 3)。Clout の『農村地理学』も、農村地理学を勉強した卒業生たちがプランナーや農村地域の保全活動家として活躍する可能性を念頭において (クラウト 1983: 242) 執筆されている。

教育に対する政策的・社会的要請への対応とアカデミック地理学の内部において周縁に追いやられつつあった農村研究の再興という意図をもった彼らの企ては、学界の中で大きな支持を得ることになった。刷新された農村地理学研究グループのメンバー数は、1983年までに280人に達した。この数字は当時のIBGの研究グループの中で4番目に位置するものであり、農村地理学研究グループは、IBGの

中で最も人気の高い研究グループの1つとなったのである⁹⁾ (Lowe and Ward 2007: 5).

Ⅳ 学際的農村研究の成立への貢献—Munton 達と農村社会学者達との共同研究

Coppock や Clout らの先駆的な試みは、現代農村問題に対する教育および研究の潜在的な需要を掘り起こし、これを発展させることに成功した。そして、1970 年代以降、ある種の農村地理学研究のブームが生じることになる (パッション 1992: iii)。しかし、1970 年代の研究は、記述的な研究に偏り、現代農村問題の実態に関する知識は深まったものの、説明的な (explanatory) 研究が欠如していた (Cloke 1980)。1980 年代の農村地理学は様々な形で理論的な方向性を模索していくことになるが、こうした流れの一つとして、1980 年代末期より政治経済学的なアプローチが出現し、この分野に大きな影響を及ぼすようになる。同じ理論的志向性を持つ農村社会学者との共同研究を通じて学際的な農村研究を発展させ、このような潮流を生み出す上で大きな役割を果たした研究者がもう一人の UCL の農村地理学者 Munton (1943 ~) である。

Munton は、1960 年代から近年にいたるまで、UCL 地理学教室において Clout と共に農村地理学の教育と研究を牽引してきた人物である。UCL 地理学教室では農業地理学を担当し、農村地理学を担当していた Clout と共にこの分野の教育・研究に尽力し、Clout と共にそのキャリアを通じて UCL に奉職することになった。例えば、Clout の『農村地理学』では、Darby や Coppock といったかつての先生に続いて、農村問題に関する議論に進んで応じてくれたことに対する Munton への謝辞がある (クラウト 1983: i)。

バーミンガム大学出身の Munton は、博士論文の作成後に UCL 地理学教室に助講師 (assistant

lecturer) として着任した。Munton は、エジンバラ大学に転出した Coppock が受け持っていた領域を引き継ぐ形となり、農業地理学の講義を開講することになる。その内容は、Morgan との共著によるテキスト『農業地理学 (Agricultural geography)』の中に反映されている (Morgan and Munton 1971)¹⁰⁾。Munton は、1969 年から 1972 年にかけて Coppock の下で IBG 農業地理学研究グループの事務局長 (secretary) を務め、1986 年から 1988 年の間は農村地理学研究グループの委員長を務めている。

バーミンガム大学に提出した博士論文において、Munton はイギリスの農業に関する研究に取り組んでおり、いち早く多変量解析に着手するなど、明示的な形で論理実証主義的かつ定量的なアプローチを導入していた (Clout 2007: 191)。

Munton は、UCL 着任後、農業地理学の他に、資源管理や土地経済学の授業を担当した。そして研究面でも、その関心領域を、①農村の交通、②レクリエーション活動がローカルな生態系に与える影響、そして、③(農場の不動産所有者としての金融機関の役割に焦点を当てた)農地市場の価格動向へと拡大させていくと共に、様々なアクターの行動とアクター間の対立・調整が農村空間・資源の所有と管理においてどのような帰結をもたらしているのか、という問題への関心を深めていった。このような研究関心に対応した分析枠組みを追い求めていった結果、Munton の研究上の方法論は政治経済学的なアプローチを採用することによって変化を説明することへとシフトしていったのである (Clout 2007: 193-194)。

ここで、1970 年代後半から 1980 年代前半にかけての Munton の研究について Clout (2007) が取り上げている代表的な著作を 2 つ紹介する。まず、Munton は 1977 年から 79 年にかけて、農業・林業・食料省 (Ministry of Agriculture, Forestry and

Food)の下で設立された、農地の取得と占有に関する検討委員会(Committee of Inquiry into the Acquisition and Occupancy of Agricultural Land)のアドバイザーに任命される。この時の経験を活かして、Goodchildとの共著で公刊した成果が『開発と地主—イギリスの経験の分析(Development and the landowner: An analysis of the British experience)』(Goodchild and Munton 1985)である。この著作は、多様な地主が存在し、将来的な資産のあり方について異なった態度を取っていることを明らかにしている。また、1983年に公刊された『ロンドンのグリーンベルト—都市封じ込め政策の実態(London's green belt: Containment in practice)』(Munton 1983)では、中央政府と地方政府のグリーンベルトに対する認識の変化、特に規制・アメニティ・土地利用の間の関係性を跡付け、地元住民・議員・レクリエーション利用者がそれぞれの目的に合致するように政府の認識を作りかえようと試みる有り様を分析している。

このようなMuntonの研究の展開と関心を考えれば、Muntonの研究上の交流が地理学というディシプリンの枠を超えて、幅広い社会科学の諸領域へと展開していったことは自然なことのようと思われる。1980年代以降、Muntonは、農村社会学者であるTerry Marsden, Jonathan Murdochらとの関係を深め、共同研究を推進していくことになる。このような学際的研究を展開する契機となったのは、1987年にUCLに農村研究調査センターが設立されたことであり、Muntonはセンター長を務めている(Clout 2007: 194)。このセンターは、先進国経済における農村開発の諸問題の研究に取り組んでいた社会科学者の学際的な集団で構成された。翌1988年に農村研究調査センターはESRC(Economic and Social Research Council)の研究助成を獲得し、Munton, Philip Lowe, Marsdenを代表者とする“イギリス農村の社会的・経済的再編成”プログ

ラムは4年間で31.2万ポンドの資金を得た(Clout 2007: 195)。このプログラムは、農村地域の社会的・経済的再編成における中心的なメカニズムとして土地開発過程に注目する。とりわけ、対立する利害関係の中でどのような形で土地に対する権利が創出され対立し再配置されていったのか、そして全国的な政策がローカルなレベルにおいてどのような影響を与えていたのか、という点に焦点が当てられている(Clout 2007: 195)。

この共同研究は、農村社会学者Howard Newbyの農場主と農場労働者の間における階級—権力関係に関する研究『恭順的な労働者—東アングリアにおける農場労働者の研究(The deferential worker: A study of farm workers in East Anglia)』(Newby 1977)に触発される形で展開した政治経済学的アプローチと、Muntonが展開したローカルな諸アクターの行動原理の分析を融合させた研究成果を生み出した。特に、『農村の構築(Constructing the countryside)』(Marsden et al. 1993)¹¹⁾は、1990年代のイギリス農村研究を代表する著作であり、Munton自身も「自らの研究で最も影響力のあるもの」(Clout 2007)であると考えている¹²⁾。これらの研究の遂行にあたっては、Muntonの弟子達も重要な役割を果たしている。Muntonの門下生には、Sarah Whatmore(1988年学位授与)、Neil Ward(1994年学位授与)ら、Muntonに近い研究関心を持つ農村地理学者がおり、Marsdenらとの共同研究のメンバーとして尽力している¹³⁾。学内的にも、Muntonは、環境研究所(Environmental Institute)の所長(2003～2006)に任命され、さらに学際的な研究を推進している(Clout 2007: 196)。

V おわりに

農村地理学という分野の出現は、マクロにとらえればイギリス地理学における農村研究の地位低下に

対する危機感と Robbins 報告書に基づく高等教育改革の進展という状況を背景に生まれてきたものであるといえる。IBG の農業地理学研究グループの農村地理学研究グループへの改称についても、Lowe と Ward は、現代地理学研究において周縁化の危機にあった活動分野を刷新するための努力としてみなされるべきであろう、と指摘する (Lowe and Ward 2007: 4-5)。また、Munton が社会学的な側面に関心を持っていたのは偶然に過ぎない、という解釈もありうる。しかし、農村地理学の誕生と発展の主たる担い手の 3 人がいずれも UCL 地理学教室の関係者であり、緊密な関係にあった、という事実に対して、UCL 地理学教室という場の影響をどのように理解することができるのだろうか。主として 2 つの点を指摘できるように思われる。

第 1 に、当時の UCL 地理学教室の自由かつ競争的な研究環境である。研究環境の評価は、研究者毎に異なったものとなりうるが、こうした雰囲気は、Clout が自らの研究を含めた「生き残り戦略」の一環として『農村地理学』の執筆に至った経緯から読み取ることができる。また、他大学から UCL に移ってきた Munton は、UCL 地理学教室について以下のように述べている。

これをすべきだ、とは決して言われなかった。自身の研究プログラムを発展させていくであろうスタッフを採用し、研究に尽力することが基本的なこの教室の伝統だからである (Munton 2005)¹⁴⁾。

これは自由主義・平等主義の学風を持ち、数多くの新たな学問領域を生み出してきた UCL の全体的な特徴でもある。このような教室の雰囲気は、Munton が、Coppock が展望していた農村地理学およびその周辺領域における学際的な教育・研究体制を実現していく上で一助となっていたのではないだろうか。

第 2 に、農村土地利用研究の系譜である。UCL 着任後、Munton は Coppock と同じように土地利用研究に関心を持ち、これに従事した。その一因は、大学院の環境保全コースの運営など、Coppock の試みを引き継いだことによるものであろう。Clout の博士論文の一部もまた、19 世紀のフランスにおける農村の土地利用変化に関するものであった (Lowe and Ward 2007: 17)。

農村土地利用研究を通じて、彼らは、レクリエーションをはじめとした非農業的な目的による土地利用の拡大やカウンターアーバンゼーションによるミドルクラスの流入と在来住民との対立などをいち早く研究の中に組み込んでいった。このような Coppock から Munton に至る農村土地利用研究の系譜は、Coppock の下で農村地理学研究グループが発足し、Munton が Marsden ら農村社会学者との建設的なコラボレーションを実現し、理論的な成果に乏しいといわれてきた農村地理学への社会理論導入の一翼を担うことになった背景の一つではなかろうか。

本稿では、それぞれの研究成果の詳細な内容や学問的意義についてはほとんど触れていない。しかし、政策的・社会的文脈や組織的文脈を無視して、新しいサブディシプリンの成立と学界内での認知を説明することも困難である。本ノートの整理を踏まえて、さらに農村地理学の成立と展開を整理し、展望する作業を進めていきたい。

注

- 1) ロンドン大学 (University of London) は、1836 年に設立されたカレッジ制の大学であり、キングス・カレッジと共に、UCL はロンドン大学発足当初からの構成カレッジとなっている。
- 2) 一方で、Woods (2009) は、この分野において自己反省のような雰囲気が存在する、とも述べている。
- 3) 筆者にとって、歴史地理学はまったくの専門外であり、

Darby の研究史上の位置づけとその特徴を説明する能力を持たない。関心のある読者は、ジョンストン (1997: 81-83) などを参照されたい。また、Darby 学派の中心人物であり、UCL 地理学教室での直接の弟子でもある Baker について紹介した金田 (2001) でも、主として Baker との関係においてではあるが、Darby の研究業績や研究上の特徴について言及している。

- 4) Baker (1992) によれば、ケンブリッジ大学異動後の Darby は、UCL 時代のような形で教室運営にリーダーシップを発揮することはできなかった、という。その理由として、Baker は (1) 大学の拡張期にあった UCL 時代とは異なり、財政的制約が大きくなったこと、(2) 既にケンブリッジ大学地理学教室の規模が大きく、十分に確立されていたこと、(3) 当時の知的環境が計量革命と非歴史的な説明様式を支持していたこと、の 3 点を挙げている (Baker 1992: 49-73)。
- 5) 例えば、Collins (2001: 263) によれば、Darby は Coppock に「君の最初の仕事は、(Coppock がわずかな知識しか持っていない) 西ヨーロッパおよび中央ヨーロッパの地誌のコースを教えることだ」と言ったという。
- 6) もっとも、金田 (2001: 301) によれば、Darby や Baker は「すべての地理学は歴史地理学である」という表現を好んで用いていたようであり、この記述もそのことを考慮して理解する必要があると思われる。
- 7) このことを端的に示す一例として、1970 年代初頭の IBG において、農村を主たる研究対象地域とする研究グループには、Coppock を委員長とする農業地理学研究グループと歴史地理学者である Baker を委員長とする農村景観研究グループ (Agrarian Landscape Research Group) があった。
- 8) Lowe and Ward (2007: 17) によれば、Clout の当初の博士論文の計画はフランス・オーヴェルニュ (Auvergne) の農村変化に関するものであったという。
- 9) なお、農村地理学研究グループよりもメンバー数が多かった研究グループは都市地理学、計量地理学、地形学の各研究グループである (Lowe and Ward 2007: 5)。
- 10) 同書は、地理学の各分野における技術・概念・原理を紹介する手頃な価格のテキストの公開を目的とした「地理学の諸領域」シリーズの一環として公開されている。
- 11) 同書は「農村地域の再編成 (Restructuring rural areas)」シリーズの第 1 巻として公開されており、理論的な内容を中心としている同書に続き、実証研究編的な内容を持つ「農村性の再構築 (Reconstituting rurality)」(Murdoch and Marsden 1994) が同シリーズの第 2 巻として翌 1994 年に公開されている。ただし、『農村性の再構築』は Murdoch と Marsden の共著として公開されており、Munton は著者に含まれていない。
- 12) この Munton の発言は、2005 年に UCL の地理学コースの 1 年生 3 人によるインタビューに答えたもののようである (Clout 2007: 195, 198-199)。
- 13) Clout (2007: 193) には、Munton が指導した博士号取得

学生のリスト、取得年次、および博士論文の題目の一覧が掲載されている。

- 14) この発言も、注 12) と同じインタビューでの発言のようである。

文 献

- 石原 潤 1992. 監訳者あとがき. パッション, M. 編 (石原 潤監訳) 1992. 『農村問題と地域計画』281-283. 古今書院.
- 大崎 仁 1990. 英国高等教育のゆくえ. IDE 現代の高等教育 319. pp. 15-23.
- 金田章裕 2001. ベイカー. 竹内啓一・杉浦芳夫編著『20 世紀の地理学者』古今書院. 295-302.
- クラウト, H. D. 著, 石原潤・溝口常俊・北村修二・岡橋秀典・高木彰彦訳 1983. 『農村地理学』大明堂. Clout, H. 1972. *Rural geography: An introductory survey*. Oxford: Pergamon.
- ジョンストン, R. 著, 立岡裕司訳 1997. 『現代地理学の潮流 (上) - 戦後の米・英人文地理学史』地人書房. Johnston, R.J. 1991. *Geography and geographers: Anglo-American human geography since 1945 (4th edition)*. London: Edward Arnold.
- ジョンストン, R. 著, 立岡裕司訳 1999. 『現代地理学の潮流 (下) - 戦後の米・英人文地理学史』地人書房. Johnston, R.J. 1991. *Geography and geographers: Anglo-American human geography since 1945 (4th edition)*. London: Croom Helm.
- 吞海沙織 2007. サブジェクト・ライブラリアンの役割の変化 - 1940 年代以降の英国大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアン. *Journal of Informatics* 4: 1-11.
- パッション, M. 編, 石原 潤監訳 1992. 『農村問題と地域計画』古今書院. Pacione, M. ed. 1983. *Progress in rural geography*. London: Chapman and Hall.
- Baker, A. R. H. 1992. Obituary: Henry Clifford Darby 1909-1992. *Transactions of the Institute of British Geographers* N.S. 17: 495-501.
- Collins, L. 2001. Obituary: John Terrence (Terry) Coppock. *Transactions of the Institute of British Geographers* N.S. 26: 263-264.
- Coppock, J.T. 1972. Agricultural geography study group. *Area* 4: 236.
- Coppock, J.T. 1973. Agricultural geography study group. *Area* 5: 74.
- Coppock, J.T. 1974. Geography and public policy: Challenges, opportunities and implications. *Transactions of the Institute of British Geographers* 63: 1-16.
- Cloke, P. 1980. New emphasis for applied rural geography. *Progress in Human Geography* 4: 181-217.

- Cloke, P., Marsden, T. and Mooney, P. eds. 2006. *Handbook of rural studies*. London: Sage.
- Clout, H. 2003. *Geography at University College London: A brief history*. London: UCL.
- Clout, H. 2005. Book reviews: Rural geography: Processes, responses and experiences in rural restructuring (Woods, M.). *Journal of Rural Studies* 21: 375-377.
- Clout, H. 2007. Richard Munton: Geographer and rural geographer. In *Contemporary rural geographies: Land, property and resources in Britain: Essays in honour of Richard Munton*, ed. H. Clout, 189-199. London: Routledge.
- Goodchild, R. and Munton, R. 1985. *Development and the landowner: An analysis of the British experience*. London: Allen & Unwin.
- Harvey, D. 1974. What kind of geography for what kind of public policy?, *Transactions of the Institute of British Geographers* 63: 18-24.
- Lowe, P. and Ward, N. 2007. British rural geography: A disciplinary enterprise in changing times. In *Contemporary rural geographies: Land, property and resources in Britain: Essays in honour of Richard Munton*, ed. H. Clout, 1-20. London: Routledge.
- Marsden, T.K., Murdoch, J., Lowe, P., Munton, R. and Flynn, A. 1993. *Constructing the countryside*. London: UCL Press.
- Miller, S. 1996 Class, power and social construction: Issues of theory and application in thirty years of rural studies. *Sociologia Ruralis* 36:93-116.
- Morgan, W.B. and Munton, R. J. C. 1971. *Agricultural geography*. London: Methuen.
- Munton, R. 1983. *London's green belt: Containment in practice*. London: Allen & Unwin.
- Murdoch, J. and Marsden, T. 1994. *Reconstituting rurality*. London: UCL Press.
- Newby, H. 1977. *The deferential worker: A study of farm workers in East Anglia*. London : Allen Lane.
- Robbins, L. 1963. *Higher education (Report of the committee appointed by the prime minister under the chairmanship of lord Robbins: 1961-63)*. London: HMSO.
- UCL Dept. of Geography. 2010. A very brief history of department. (<http://www.geog.ucl.ac.uk/about-the-department/a-very-brief-history-of-the-department>) (最終閲覧日：2010年7月8日)
- Woods, M. 2005. *Rural geography: Processes, responses and experiences in rural restructuring*. London: Sage.
- Woods, M. 2009. Rural geography: Blurring boundaries and making connections. *Progress in Human Geography* 33: 849-858.

Establishment and Development of Rural Geography: A Focus on UCL Geographers, Terry Coppock, Hugh Clout and Richard Munton

Shin KAJITA (Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo)

This paper traces the establishment and development of rural geography, focusing on three UCL geographers: Terry Coppock, Hugh Clout, and Richard Munton. Coppock, as the chair of the Institute of British Geographers and the founder of its Rural Geography Study Group, and Clout, as the author of influential and epoch-making textbook '*Rural geography*' (1972), which showed the scope of this subdiscipline, made significant contributions to the establishment of rural geography. Munton, who succeeded Coppock's research and teaching areas, extended research activities beyond the barriers of discipline, especially with well-known rural sociologists such as Terry Marsden. They developed constructive combinations between Munton's behavioral analysis for each local actor and the political-economic approach developed by rural sociologists, called as critical rural sociology. Their book '*Constructing the countryside*' (Marsden et al. 1993) was highly influential and led to the creation and development of interdisciplinary rural studies. The open and vibrant academic atmosphere of the UCL Department of Geography and its rural land use study tradition from Coppock to Munton seem to be one of the reasons that the department has functioned as a research core for the establishment and development of this subdiscipline.

Key words : rural geography, UCL Dept. of Geography, Terry Coppock, Hugh Clout, Richard Munton